

「オープンダイアログの基礎、リフレクティング・プロセスを学ぶ」

関西研修会(2016年11月12日京都) 報告

前回の明治大学でのワークショップを体験した人には、今回との差異は大きな意味をもたらすに違いない。今後のグループの展開のために、また、次の1月のワークに初めて参加する人のために参考になることを願いながら、前回のワークショップとの違いを中心に報告しよう。

1) 前回のわずか3時間のワークショップとは違って、今回はお昼休みを含めると6時間という時間で行われた。しかし、実際はアツと言う間に時間は過ぎ去ったという印象を多くの人を抱いたようである。肝心要の全体での最後のシェアリングが不十分であったことを考えると、あと1時間は欲しかった。

2) 参加者はコウディネータ兼ファシリテータを含め前回の倍、32名。実に多様なメンバーで、年代も10代から60代まで、職種も対人援助の関係者が多かったが(特に訪問看護師は職種として最多で4名)その他、社会福祉や、もちろん臨床心理関係の専門家からも、参加者も多かった。京都橘大学でおこなわれたこともあって、通信課程の社会人学生と若い通学生が合計7名含まれていた。

3) リフレクティングに入る前に、オープンダイアログの土台となる人と人とのフラットな関係のために名前のプレイ・ワークや 個人と集団との自由な関係を作るべく OST オープンスペーステクノロジーも取り入れた。

4) やり方も前のものとは大きく変えて、ワークショップが始まる前からある種の対話が既に始まっていること、終わってからも、なんらかの対話の可能性を示すなど、さまざまな工夫をした。例えば、申し込み者ひと一人に予めの準備することを個人メールで伝えた。オープンダイアログダイアログについての読むべき書物の案内、YOUTUBE 動画の紹介、そして第3の名前を考えておくことである。

5) しかし、相変わらずなんの準備も積極的にせず当日に現れるというメンバーも少なからずいて、それは本人には残念なことになった。他方では、そうした全くの素人は、<専門家はその兜をいかに脱げるか?>が重要な課題になっているこのワークショップにとっては、その存在自体が大きな意味をもつことがあった。実際、問題を話してもらう人と聞き役のパアの傍らでふたりの対話を聞いてそれについて自由に話してもらう作業のリフレクティングにおいて、その素人性が大きな影響を及ぼしたグループの報告があった。

6) 臨床心理学を学び始めた者が、出された問題に対して、わかったつもりになって、すぐに判断や解釈あるいはアドバイスをしたり、「わかる、わかる」とやたらと共感の表現をしたりすることに含まれる問題や危うさが認識できた。それ以上に、リフレクティングの考え方について全く無知で、ナラティブ・アプローチへの理解もなく、近代直線的論理に囚われている専門家が集団に与え得る悪影響についても、考えなくてはならないと思えた。

7) 参加者数が予想以上で、しかも全体を一人でするのは荷が重すぎたので、直前にアシスタントを投入することに決めたが、この存在はワークショップ本体ばかりか、その後の懇親会や、グループ展開やその後の吟検検討のためにも大きく役に立つことになった。

(滝野 功久)